(四) めぐりあい

母ともたのみし乳母にさきだたれた姫は、その霊をいともねんごろに弔い、旅籠の主人はじめ、お世話になつた人々に厚くお礼をのべて、またも巡礼姿に身をやつし旅にでた。

都をでて早や十年、日一日として良人舎人のことを思わぬ日とてなく、また日本国中ほとんど歩きまわつたのに、良人をさがし得なかつた。これでは神も仏もないものかと、神仏までうらめしく思われる日もあつたが、いやまださがしたりぬのだと、覚悟をあらたにして、乳母の菩提を弔い、神仏の加護を願い旅の日を重ねた。

ある夜、姫の枕辺に乳母があらわれ「若殿は出羽国米ケ森の麓に住み、念仏三昧の日をおくつていることがわかりました。姫一日も早く尋ねて行きなされ」という。姫は不思議に思い「乳母、乳母は一昨年死んだのに、いかにして良人のところを確め得たのか」と聞くと、乳母は「妾は死して魂魄となり日本国中を姫の先へ先へと巡りあるいて、確めたのであれば必ず必ず疑いたもうな」と答えたかと思うと、霞の如く消え失せた。姫は夢さめたる心地せしも夢にあらず、ただただ忠義厚き乳母の恩愛に涙を流すばかりであつた。

翌朝、宿を早々にたつて出羽国へと急いだ。途中湯殿山、月山、羽黒山の三山に参詣し、数多くの参詣人に会うたび、礼を尽して姫は米ケ森という山のある地の様子を尋ねたが、人々はただ頭をかしげるのみで知つている人がほとんどいなかつた。姫は力を落したがこんなことではならないと、ゆきあう人々を、次々と止めては尋ねた。

ある日、とある林のはずれに休んでいると、一人の老人がきた。無駄とは思つたが問いかけると、老人はよく米ケ森のことを知つており、何かと良く教えてくれた。姫は三山に詣でしおかげと老人に厚くお礼をいい胸をはずませ旅を急いだ。程なく日数はつもりて、形の美しい米ケ森が見えはじめた。麓の村についたので、岩渕舎人という人を知らないかと尋ねると、村人達は知らぬというばかり、喜び勇んで来たのに尋ねる良人はおらず、風俗も違い思うがままに言葉もとおらぬ辺地に心細く思われ、ただ茫然と立つばかりであつた。姫はあれやこれやと考えていたが、ふと思いて、村人達にむかつて「米ケ森の麓に念仏をとなえて暮している人がおらないでしょうか」と聞くと、「ああ、その方ならおられます。この道を少しゆかれると小道がわかれているが、その小道に入り小さな坂を登ると庵があります」と教えてくれた。姫はとぶようにかけて草房の扉を押し「妾は鎌倉の朝日姫なり、あなたは岩渕舎人殿にはあらざるか」と早や声をくもらせて問うと、墨染の衣を着た庵住はその言葉に驚き「御身は朝日姫にてありけるか、舎人とは拙僧なり」といいも終らず、二人はかけより手を取り合つて大声をあげてなくばかりであつた。

薪や炭を背にした杣夫達や野良帰りの百姓達は、比丘の草房より人の泣き声がするので不審に思いたち寄つてみると、旅の女が草履のまま比丘の胸にもたれ、比丘は女をしつかと抱きて泣いている。百姓達は声をかけることも忘れ、ただ見守るばかりであつた。しばらくして百姓の一人がその訳を問うたところ、比丘は涙ながらとぎれとぎれ姫の旅を語つた。これを聞いた百姓達も感極つて泣きだしてしまう仕末、泣く声が加つて大きくなつたため、本道を通る人々まで集つて、その始終を聞き、思わず貰い泣きするばかりであつた。ややたつて百姓共は相談し、先ず水をくんで来て姫の草履を脱がせ、数人は家に帰り、酒よ肴よと色々用意して帰り、姫を入浴させ、休むまもなく婚礼の儀式をあげた。村人達は酒がまわるにつれて、歌や踊りがでて賑わつた。

へ逢うて別れし鎌倉が
今日の逢う瀬は比丘が坂
雪のはだえは朝日にとける